

—
現代生活の指針
—



現代生活の指針 目次

推薦のことば……………久保田正文

第一話 はじめに……………一

一、宗教とは……………三

(一) 宗教のえらび方……………四

(二) 本当の信心……………五

(三) 本当の信仰……………八

(四) なぜ信仰は大事?……………九

二、道徳と宗教……………一三

(一) 多神教のこと……………一四

(二) 道徳の発達……………一五

(三) 国民道徳の基礎となるべき仏教……………一六

三、迷信と正信……………一六

四、仏教の根本精神……………一四

第二話 仏教の教え……………一七

一、四諦の法……………一七

一、苦諦／二、集諦／三、滅諦／四、道諦

二、十二因縁のこと……………一七

一、無明／二、行／三、識／四、名色／五、六入／六、触／七、受／八、愛／九、取／十、有

完

十一、生／十二、老死

三、三 惑…………… 四

一、見思惑／二、塵沙惑／三、無明惑

四、彼 岸…………… 吾

五、六波羅蜜のこと…………… 六一

(一) 布 施…………… 三

一、財施／二、無畏施／三、法施

(二) 持 戒…………… 六

(三) 忍 辱…………… 七

(四) 精 進…………… 八

(五) 禪 定…………… 九

(六) 仏 智…………… 七

六、九識について…………… 六

一、六識／二、七識／三、八識／四、九識

七、八相成道のこと…………… 一〇

一、下天／二、託胎／三、出生／四、出家／五、降魔 六、成道／七、転法輪／八、入涅槃

八、成仏について…………… 一〇四

第三話 法華経のお話…………… 一〇九

一、仏の教えの中では法華経が第一…………… 一一

二、聖徳太子のご信仰…………… 二四

三、印度における法華經と世親	二八
四、中国における法華經	二三
五、羅什三藏	三五
六、天台の師たち	三一
(一) 天台大師の修行	三五
七、天台大師の教義	三九
(一) 五時	三九
一、華嚴／二、阿含／三、方等／四、般若／五、法華涅槃	三九
(二) 八教	四四
一、化法の四教／二、化儀の四教	四四
(三) 一念三千と十界互具	四四
一、地獄界／二、餓鬼界／三、畜生界／四、修羅界／五、人間界／六、天上界	四四
七、声聞界／八、縁覚界／九、菩薩界／十、仏界	四四
(四) 十如是	四六
(五) 三種世間のこと	四六
一、五陰世間／二、衆生世間／三、国土世間	四六
八、日蓮聖人の教義	四六
(一) 五綱	四七
一、教／二、機／三、時／四、国／五、序	四七
(二) 三秘	四七

一、本門の本尊／二、本門の題目／三、本門の戒壇

(三) 内典の孝経 一八七

九、成仏のこと 一八〇

(一) 悪人の成仏 一七〇

(二) 女人の成仏 一六二

十、明るい世界を作るには 一六二

十一、法華経をもって教化する功德 一〇〇

十二、伝教大師遺訓 一〇四

(一) 大日本のこと 一〇四

(二) 山家学生式誓文の中より 一〇六

(三) 五箇の誓願 一〇八

(四) 遺誠十五箇条の中より 一三五

第四話 四箇の格言 三三九

一、四箇の格言 三三三

(一) 念仏は無間のこと(五種の雑行) 三三七

(二) 禅は天魔のこと 三三六

(三) 真国は亡国のこと 三三六

(四) 律宗は国賊のこと 三五九

二、法華経の肝心の真言なり 三六四

第五話 法華経の七喩 三七五

一、火宅と三車一車のたとえ	二七八
二、長者窮子のたとえ	二九一
三、三草二木のたとえ	三〇〇
四、化城宝所のたとえ	三〇〇
五、繫珠衣裏のたとえ	三〇六
六、髻中の明珠のたとえ	三〇七
七、良医治子のたとえ	三一九

推薦のことは

「信有りて、解無ければ、無明を増長し、解ありて、信なければ、邪見を増長す。

信と解と円通して、方まきに行ないの本と為る。」

とは涅槃經の文であります。

「行と学の二道を励み候べし。行学絶えなば、仏法はあるべからず。」

とは、日蓮聖人が、諸法実相鈔に示された訓誡であります。

これは、ともに仏教信仰の正しい方まきを示したものと思いますが、この本の著者鈴木修学師は、まさしく、信解円通の人であり、行学二道の実践者であります。

だから、この「現代生活の指針」に述べてあるところは、単なる観念的な理論の説明ではなくて、一つ一つ具体的な生活の体験からきたものであります。これはただ机上で書物を学んだだけでは得られない貴いものであります。著者のような信解と行学を兼備した人にして、はじめて能くすることでありましょう。

本書の第一話は、宗教そのものを取扱って、宗教にはいろいろの種類のあること、道徳と宗教との関係、迷信と正信について語り、仏教の根本精神で結んであります。第二話は、仏教一般の説明で、四諦、十二因縁、六波羅蜜等の公式的な説明から、人間の迷える姿、悟りを求める状態を語り、八相成道の説明に及んでいます。第三話は法華経のお話で、ここでは、法華経を中心としてさまざまなことがらが述べてあります。教理の問題、弘通の歴史の問題等であります。第四話は、四箇の格言について説明し、第五話では、特に、法華経に説いてある、七つの譬喩を説明しています。第六話は、妙法のお話となっていますが、ここでは、妙法蓮華経の意味内容から、世間の日常生活のうえに、この妙法が、どんなに活現しているか、その実際の状況と、それに対する著者の批判とがみられます。第七話は、雪山童子の物語や、ウラボシの意義や珠数のお話など、信仰生活の卑近のことについての説明であります。第八話は、信仰問答となっていて、貧しいものにも布施はできるか、法華経の広宣流布は、どうすればよいか、諸仏はみな、本仏釈尊の分身である、等のことがらが、述べてあります。

第九話は、日蓮聖人の御遺文となっていて、祈禱鈔、生死一大事血脈鈔、法蓮鈔、佐渡御書、如説修行鈔、諸法実相鈔等について述べてあります。立正安国論や、開本兩鈔等については、他日を期するつもりのように察せられます。

以上が、この本のあらすじですが、この本は、単なる書齋から生まれたものではなくて、著者の宗教家としての実践から生まれたところに特徴があると思います、ここに推薦する次第です。

久保田正文

第一話
はじめに

一、「宗教」とは

真に住みよい日本の建設をめざすならば、その考え方の基礎に正しい信仰がなければならぬと思います。この大切な宗教の選択をあやまれば一大事です。どうしてその選択をすればよろしいか。宗教には、りっぱな教えと、教える者がそれを実行してりっぱな結果を得たという、二つの条件がそろわなければなりません。「宗」の字は「範^{はん}とし」「鏡とするに足る」という意味があります。範とはその行ないが模範となること、鏡とは自分の行ないを鏡のようなりっぱな教えに照らし、自分の欠点が明らかになり向上して行くものであることです。その教えを行なっても立派な人格者を作らずその教えが自分の鏡にならないような下劣な教えでも宗教と言われているものもあります。それは宗教として何等の価値のないものであります。仏さまというりっぱな理想の人格を作り上げた、本当にお手本とし、鏡として自らの行ないを向上させて行く

仏さまの教え、法華經こそ本当に正しく高い理想の宗教と 생각합니다。人は第一の宗教をもって修行し、仏をつくり極樂をつくり、幸福の境遇を作らねばならないのであります。これが住みよい日本建設の基礎でもあり、宗教信仰の目標でなければなりません。どなたも宗教の選択は、あやまりのないようにしていただきたいと思ひます。

(一)、宗教のえらび方

平和という言葉は聞くだけでもたのしい言葉です。人の一生はどうか平和でありたいと思うが、その希望は充されることが少なく、不平、怒り、争いなどで、心からの平和はたもたれないで、来るものは憂い、悲しみ、悩みがあまりにも多いようです。このいやな苦しみをなくして平和に暮せるように教え導くものが宗教であります。

仏さまは、自ら人間としての苦勞をかさね、その苦勞を突破し心を平和にたもち、また世の中の人の心をも平和にすることに努力なされた方です。これこそお手本にする行ないであります。

鏡はすべての物の真実を写すものでありますが、仏さまのお説きになった教えを鏡として自分の心を写して見るならば、「我が心鏡に写るものならば、さぞやみにくき姿すがたなるらん」という歌もありますように、その欠点がよく解るのであります。また長所も見出すことができます。かように我々が模範とすべき行ないがわかり、日常の生活について心も平和、家庭も平和、世の中も平和になる教えをかねそなえているものが宗教でなければなりません。だから皆さんの幸、不幸はこの宗教のいかんによって定まると言えます。私は仏の教えこそ、この二つを完全にそなえており、徹底的にすべての人が導びかれて幸を得、平和を成就じょうじゆさせるものであることを保証し、お励すすめするのであります。

(二)、本当の信心

信心ということは、心に信ずるということであります。何を信ずるかといえば、世の中のすべての人が尊敬し、その尊敬が何時の世にもかわりないものを信ずることで

す。それは、仏さまのような方の行ないと、その教えを信ずることでありませう。世の中には仏さまを信ずる人は沢山ありますが、ほんとうに信じているでしょうか。

仏さまは、苦しい世の中に立って、自ら苦しみ、その苦しみの中から幸を見出した人です。そして世の中の人々を救い助けようと努力した方です。仏さまはどんな苦しい中に立っても人を慈む心を忘れず、無理を言う人があっても腹立ててはならぬと教え、自らも苦しい世の中で忍辱の行ないをされた方です。われわれはとうとい仏さまを信じて、仏さまのとうとい行ないを見習い、実行をせねばならぬ者だ、仏さまの行ないと教えはまちがいないと了解し、仏さまのような行ないをして心を明るくして喜び多いものにする、これが本当の信心であります。

何だか有難い、人が頭をさげるから自分も頭をさげるのだというような信心は形ばかりの信心であります。老人の寺詣りといひまして、行きと帰りは嫁の悪口を言ひあつたり、自分の行ないは悪いが極楽へやってもらいたいという願ひをする。若い人はどうかといへば商売繁盛するように、樂をして金が儲かるようにと願ひ、さては隣

に大きな蔵くらが建てられた、日があたらぬようになって困った、はやくこの蔵がなくなるように、ということをお願いに行く。こんなことをして自分は信心していると言っています、これは信心でなくてのろいであります。形かたちは信心しんじんのように見えて実は鬼き畜ちくの心でありますから、反対に罪悪であります。信心はどこまでも心の建て直しをする信心でなければなりません。

声聞しょうもん乗じょうと云って仏様の教えでは一番低い方の教えでも、小さな欲望みだを充みすための信心というものは全然認めていないのです。小さい自己にとらわれての信心というものは、自分の煩惱ぼんのうを増長ぞうちようせしめるものであって仏の教えではありません。世間の無意味な生活をはなれて一段と高い生活をしたという心持がなければ、仏教を学んだとはいえないし、信心とも言えないのであります。欲望の信心というものは、ますます煩惱を増長させ、心の平和、世の中の平和を破るものでありますから、これは小さい教えというよりもその宗教が社会に悪い影響をおよぼすことを考えると、むしろ邪教じやくきょうといわねばなりません。仏の教えはどこまでも人の心の建てなおしをするものである

のに、大切な仏の教えをあつかう者の取扱いが悪く、邪教視されるようなものにするならば大きな罪悪であります。仏の教えはどこまでも人の心の曲まがまっているのをまっすぐにするものであります。聖徳太子は、十七ヶ条の憲法に
「三宝ぼぼうに帰依きえせずんば何なにを以もつつてか枉まがれるを直ただうせん」
と仰せられています。よく考えねばならぬと思ひます。

(三)、本当の信仰

かように宗教の意義と、信心の心がけをよく了解します時、はじめて行ないがよくなります。

「信解しんげえんつう円通して正まさに行の基もととなる」

で仏さまの教えのごとく、心も平和となり、家庭も平和になる。病氣災難ものがれてア、有難いことだ、ということになるのです。人にほどこしてよろこばせ、よい行ないをしてよろこびとするようになれば、行なったのちが本当に嬉しいのであります。

堪忍かんにんをした後は本当によかった、有難いと思えます。仏の教えを実行してよろこぶようになつてはじめて信仰といえます。仏の教えを信じ、有難いといつて仏のご恩に感謝し、お経をとくとび、その教えをわからせてくれた僧をうやまうその時にはじめて信仰しん|| 信じ仰あおぐということになるのであります。この意義さえも知らずに、仏さまを拜んでいるから仏教徒だと思つていようでは、仏教は名あつて実のないものになつてしまい、だんだん衰亡すいぼうして行くばかりであります。これは仏の教えを弘めねばならぬ坊さん達の責任でもあると思ひますが、皆さんがたもはやくこういうことにめざめて、正しい宗教をえらび、正しい信仰をしていただきたいと念ねんずるものであります。

(四)、なぜ信仰は大事？

人の一生はたのしいものでしょうか。子供の時代から苦勞する者も沢山ありますが子供の間は苦しみもわりあい苦痛としないものです。だんだん成長して青年時代になると希望が多くなり、希望が多くなるにつれて、希望が満足されないので失望をする

その失望は苦しみであります。人の一生は、かりに楽しく暮しているようにみえても本当は苦しいものです。苦を待つ者はありませんが、自然に愛別離苦あいべつりくといって愛している者に、はなれるという不安ができます。又、怨憎会苦おんぞうえくと申して、自分と気の合わない者と一緒に暮さねばならぬとか、求不得苦ぐふとくといって、求めようとするものが求め得られず、儲けようとしても儲からずという苦がだんだん重かさなってきました。親にはやく別れる、夫婦の死別、子に先立たれる親、ことに歳老いて後をまかせようとしていた子に別れるということは、本当に歎なげきの中の歎きであります。一生は幸のように見える人でも、死んで後の生処しょうじょというものを考える時、何となく寂しい心持ちになります。

かように人間の一生をたのしく、希望に満ちたものにするにはどうすればよろしいでしょうか。これを解決するものが信仰です。信仰は、よい教えを信じ仰ぐということです。我々の一生を、楽しく生き甲斐がひある生活とする教えを信じ仰いで、日常生活に活用することが大事です。信仰には神の教え、仏の教えの別があります。いずれが

よいでしょうか。神の教えもよいのですが、深く考えおよびますと、神の教えでは満足できぬようになります。仏さまの教えはその真理が深く、われわれの目的をかなえさせます。しかし仏さまの教えにも小乗しょうじょうあり、権大乘ごんだいじょうあり、実大乘じつだだいじょうの法華経ありという風に、低い教えと高い教えがあります。高い教えはわれわれが実行して、ただちによい結果をうる教えであります。われわれの一生の暮し方を解決させてくれる教えは仏教です。仏教の肝心は法華経であり、法華経以前の教えは、法華経を学び悟るに大切な基礎となる教えです。仏教は法華経です。法華経の内容をよく知って日常生活に応用すれば、病やまいをなおそうと思わずとも病はなおり、いろいろな苦しみは転じて幸いとなるのです。幸福を望まなくても、法華経の実行は、即幸福そくこうふくです。福という字は、自分の働きが、人を救い助け、自分の働きで他の人々に幸せをあたえる力があることであります。この力で働き、幸せに暮す、これを幸福ということです。人を助け救い、幸せをあたえる働きをして、喜びとする、これこそ生きて行くために最も大切な考え方であり、この心がけと働きができるようになれば、苦というものはみんな解

消して、長い一生も、また未来にも希望と光明こうみやうを見出すことができます。この教えを信仰しなければ大切な一生は無意義となってしまう。おたがいにこのことをよく考えて法華経の信仰をなお深く、またこの信仰をすすめて、幸福な人を多くするようにはげみましょう。信仰をしない人生は無意義です。

二、道徳と宗教

宗教は道徳の基礎であると考える人もあり、宗教は道徳を超越したものであると言っている人もありますが、宗教と申しましても種々なものがありまして、道徳の基礎となるべきものもあり、ほとんど道徳と交渉を持たぬものもあります。私達の信じています仏教は、たしかに道徳の基礎となるべきものであります。宗教は道徳よりもさらに高いものであり、さらに深いものであります。

ここに述べたいことは、宗教と学問のことです。「学」ということは、多くの学者の説をくらべ合わせて、その採るべきは採り、捨てるべきは捨てること自由であります。宗教の信仰は、われらの一切の活動の根底をこれに托するのであります。それゆえもし劣等な宗教を信じて、これに一切の働きを托するということになれば、生涯をあやまるような結果を生ずるのでありますから、この点深くいましめなければなら

ぬと思ひます。

これを譬えれば、険しい山路をのぼる時には杖が必要であります。その杖(宗教)は最も丈夫なものをえらばなければなりません。もし弱くて山登り(人生)にたえぬような杖だと、途中でその杖が折れて、その拍子で谷底へ落ちるかも知れません。そんなときに杖を使うことは、かえって杖を使わぬより危険なこともあります。

だから宗教の選択がまことに大切であることがわかります。

(一)、多神教のこと

いかに人の力をつくしても、人間の力以上のものがあることを否定することはできません。風雨、季節の変化、海に波の立つのも、おそろしい雷の鳴るのも、人間の力では自由にすることはできないものです。神の信仰は、これらの自然界の力を人間以上の有力なもの活動であるように考え、これを神として崇めるようになったものです。さればかようにしてできた宗教は「多神教」であります。それは自然力を神とし

て祀り、われらの生活に助けをあたえんことを祈り、われらの生活に迫害をあたえぬようにと祈るのであります。

この程度の信仰の中には、善悪とか、邪正じやせいということはあまりおりこまれていないのであります。「神を信仰する」というものの中にはかようなものも多いと思われま

(二)、道徳の発達

宗教がかくの如き程度である間に一種の国民道徳が発達してきました。元來人は単独で生活できるものではありません。部落という集団をつくって住むようになり、部落がしだいに発達して、自然に併合せられ、秩序がそなわって国家というかたちともなるのであります。かようにして多数の者が共存しなければならぬので、その中にくに思慮しりよふんべつ分別のある者が、多数の人の平和、幸福なる生活を考え、多数の人の同意を得て、種々な制度を立て、法則をさだめるので、こういうことがいずれの国にもいく

たびもかきなつて、国々に国民道徳が発達していくのであります。

(三)、国民道徳の基礎となるべき仏教

しかし、人の智慧ちえが進むにつれて、習慣的に教えられてきた道徳を無条件に実行することのできぬ時代がくるのです。なにゆえに親に孝行せねばならぬか、なにゆえに他人に親切にしなければならぬかという点についても、明らかに答えがあたえられなければ、無条件に実行することはできないと考える人が多くなります。

こうなりますと、それらの道徳は人の人たる本性に基礎をもつものであるということが、真面目に考えられなければならぬようになります。さて人の人たる本性が、誰にも共通にそなわっているのはなぜであるかと考えてみると、それは、すべての人が一つの大きな力によってまもられ、導かれ、おさめられているからであるという考えが発達してきます。かようにして以前には没交渉ぼつこうしやうで近づかなかつた道徳と宗教とが結びつくようになります。

仏教のうち、ことに法華経では人々にはみな仏性を具有していると言き、その仏性を開發せしむべき行ないがすなわち「善」であり、「正」であると教えています。この仏性を開發せしめんがために仏の教えを信じ、これを日常の生活の上に実現してゆくべく、努めることが肝要であります。

木の葉が茂り、花が美しく咲くためには、その木の根がしっかりしていなければならぬように、われわれの日々の行ないがみな美しくあることを望むならば、人生の真意義をしっかりとらえなければならぬが、仏さまの教えはこの要求にもっともよい教えであるのであります。この意味において宗教は道徳に超越していると考えられますが、これは道徳よりも高いものとか深いものとかという考えから進んで、超越したと言う言葉となったのが本当であると考えます。

三、迷信と正信

迷信と正信とはなにによって區別せられるか、信心をするのには何を本尊ほんぞんとすべきかを明らかにすることが肝要かんようです。信心をするにはいかなる心をもつて信すべきかということもよく考えて決定しなければなりません。狸たぬきや狐きつねを拜むとか、蛇へびや木を拜むあるいは、生前においてとくにすぐれた徳をそなえていたのでもない人の靈を祀つて福をもとめるといふようなことは、もちろん迷信であります。

また信心するその人の考え方があやまっていけば、たとえその本尊は正しくても、迷信になってしまうのである、ということも知らなければなりません。信心をするといふことは、われわれの心の煩惱ぼんのうをのぞいて清浄せいじような心になり、清浄な行ないをするような力を得んがためであります。それゆえに信心をすることによって、自己の煩惱を増長させるような信心は、一切これを迷信として排斥はいせきせねばならないのです。

たとえば自分の一身が幸福になるために、他の人にいかなる迷惑をかけてもかまわぬという考えは、おそろしい煩惱であります。たとえお釈迦さまを本尊としていても自分の競争者がみな失敗して、自分のみが榮えて行くことを祈る信心なれば、それは迷信といわねばなりません。しかし、今の世の中は何事につけても、万事競争がはげしくなっていることは承知しています。そのはげしい競争の中にあつては、何人もそのはげしい競争にうち勝つためには、手段をえらばぬというおもいもやむを得ません。

静かな電車に乗る時は、おたがいに先をゆずってもよろしいが、こみあう電車や汽車に乗る時は、自然に人を押しのけるようになるのも止むを得ないこととなります。

いかに科学が進歩しても、科学的な知識によって解決し得られぬことは、世の中には沢山起つてきます。科学の力によって解決し得られることは、世の中の小部分にすぎぬことになりまして、科学万能でないことは科学者でも明らかにみとめているのであります。それは、この複雑な人生には人の知識では推測^{おしはか}することのできない出来事にあつて、自動車がまことに多いからです。病気になる、思いがけない災難にあつて、自動

にはねられて怪我をしたということがたびたびあると、人間以上の何等かの力にたよ
り、こういう苦しい中を脱出したいという思いが、強くなってまいります。

そういうように自己の欲望を満足させるためとか、病氣や災難をのがれるためにと
いう動機から、人間以上のなんらかの力の助けを求める人が、しだいに多くなってき
ます。このような要求に応じて種々な宗教が起こりますし、その中には迷信的なもの
が大部分をしめるようになってきます。

宋の蘇東波が

「もし人々をして願ねがいて即すなわち遂とげしめんには造物ぞうぶつただまきに日に千變せんべんすべし」

と詠えいじましたが、人の欲望というものは、他を省かえりみず、自己のみを満足させることは
とうていできないことになります。農夫は米が高くなるように祈り、米を買う者は米
の値が安くなるように祈り、一方に明日の天気を晴れにしたいということを祈る者が
あり、他方には雨を降らせたいと祈るものがありで、その欲望を両者ともに満足させ
ることはできません。また災難をのがれても、その当座は感謝しますが、いつの間に

か感謝の心が消えてしまうのが人間であります。

所詮しよせん一つの心の持ち方が根本からあらたまらなければ、いかなる境遇の者も満足を得られないし、安心ということも得られないのであります。現在の世の中はこんな風であると思います。

しからばその一つの心の持ち方をどうすればすべての人が幸福になれるか、その心の根本はどうしたならば変えることができるかと申せば「仏さまの教え、然も法華経」こそ、その心の根本を変えて、いかなる人をも幸福と満足にひたらせることができるのであります。

観普賢菩薩行かんふげんぼさつぎょうほうきぎょうの法経ほふきぎょうの中に

「諸もろもろの業障海ごうしょうかいは皆妄想みなもうそうより生ずしやう、衆罪しゆざいは霜露そうろうの如ごとく、慧日えいちよ能く消除しやうじよす」

とありますが、仏さまの教えによって、自己の持っている仏性を開發せしめ、のぼして行けば煩惱ぼんごうがのぞかれて行くのであります。それは空に日が輝けば、空気が温かになるとともに、草や木の葉の霜や露がみな消えてゆくのと同じであるということ

す。

われわれの心に起る煩惱もいろいろであり無量でありまして、これを除くことは容易ではありませんが、仏の教えを信じ行なって行けば、仏性が長じのびていかなる周囲の事情にも正しい心が変化せぬようになり、永く平和にして安穩あんのんな生涯にはいることができます。故に仏の教えを信心して日常生活に実行すること、これこそ真実の意味での利益をうることとなります。これが「正しい信心」であります。こうして自己の仏性をのばすべく、いわゆる菩薩行ぼさつぎょうをあげむべきであります。法華経はその菩薩行ぼさつぎょうを教えた唯一ゆいいつの大乗経だいじょうきょう典てんであります。

心に正しい教えを信ずることもなく、行なうこともせずして、ただ暇のある時に、口のききだけで法華経を読んでいても、それだけでは仏性は開発せられることはないと思われます。したがって煩惱がのぞかれることもありません。そのときはむしろ煩惱は長じてくるでしょう。そこで正しい分別ぶんべつを失なうて、自分の欲望をとげるためにさまざまな神さま、仏さまに祈りをかけるといふようになります。お釈迦さまを本尊

としていても、浮気をして迷信にはいつてしまうのです。

みなさんはかように迷信の多い時代に、法華経の眞の精神を解し、身にこれを実行して証果をえていただくのです。かならず多くの世間の人々の心をも動かし、仏さまが、「法華経広宣流布」をご予言下さったように、仏の教えを本当に信心して、かたい信念の上に立ち、明るい世界とすることができの方々です。このことは何にもかえられないとうとい善の業であります。